

外国人と共に学び、共に暮らす

TOMONI-ともに-

滋賀県地域日本語教育推進事業ニュースレター

2024年度 Vol.2

滋賀県では、外国人県民が地域社会で孤立することなく、安心して暮らせるよう、様々な地域日本語教育推進事業の取組を行っています。今年度もニュースレター「TOMONI-ともに-」で様々な「地域日本語教育推進事業」の情報を発信します。

第2期 オンラインモデル日本語講座について

滋賀県地域日本語教育推進事業のモデル日本語講座では、昨年度に引き続き、第2期にオンラインモデル日本語講座を開講しました。地域日本語講座をオンラインでするのはいろいろと制約があり、受講者も指導者もやりにくいのでは？と思われる方もいるかも知れません。しかし実際は、今年度の第1期モデル日本語講座と同じカリキュラム・時間帯・回数で、入門クラス・初級クラスの受講者の方々が日本語を学び、2月16日（日）に無事閉講式を迎えました。

Zoomを使ったオンライン授業のいいところは、近くに日本語教室がない人でも、気軽に自宅から日本語を学べることです。特に初心者で日本語学習に不安がある人は、家族のそばで学べるという安心感もあります。日本語がわかる家族や友人が隣の部屋にいて、休み時間にちょっとした疑問点を解消できることもあるでしょう。

とは言え、対面で学んだ方が理解しやすい内容もあります。例えば、現場指示の「これ・それ・あれ・どれ」です。第2期オンラインモデル日本語講座では初日の授業をスクーリングとして、対面で講師が「こそあど」の概念と使い方や日常よく使うあいさつを導入し、これからの授業で主に使用する3種類のテキストとその名前が覚えられるように、旗振りゲームのような遊びを取り入れました。オンライン授業のデメリットの1つとして、対面授業よりも講師の指示が伝わりにくいことがあります。初めに使用テキストの名前に反応できるようにしたり、「〇ページを見てください」などの教室の言葉に慣れてもらったりすることで、ひとつひとつの指示に時間がとられることも徐々に減っていきます。スクーリングは講座期間の中ほどにも設けることで、モチベーションの維持にも繋がります。日本語で話すことに対して少し抵抗感が薄れてきた頃にクラスメートと対面で学ぶことで、受講者同士の結束も深まっています。

第2期オンラインモデル日本語講座のわかばクラス（初級者クラス）は、学習意欲の高いクラスで漢字学習に関心がある人も多いため、メインテキストの「いろいろ」に登場する漢字学習も取り入れました。滋賀県モデル日本語講座では、メインテキスト「いろいろ」、副教材「くらしの日本語inしが」の他に、片平協子地域日本語教育主任コーディネーターオリジナルの補助教材を活用しています。授業内では時間のとれない、

文字や文章の書き練習の教材です。今年度のオンライン講座では、さらに「いろいろ漢字」の補助教材を準備しました。漢字の読みや書き順だけでなく、受講者が自分で漢字の意味が推測できるように部首や成り立ちのイラストも掲載しています。また、漢字のなぞり書きができる欄も十分に設けました。補助教材は紙媒体のものだけでなく、フラッシュカード代わりのスライドもあります。

受講者の皆さんは、思った以上にオンラインでの授業に抵抗感がないようです。ただし、スマートフォンで受講する人が大多数なので、スライドの文字の大きさや配置には留意が必要です。



初日のスクーリングにて
「こそあど」やあいさつを学習



中ほどのスクーリングにて
おもちゃつきをして日本の正月についての体験学習

滋賀県主催「令和6年度日本語学習支援者セミナー スキルアップ編」

令和6年12月と令和7年1月・2月の3回に渡って、「令和6年度日本語学習支援者セミナー スキルアップ編」を開催しました。

第1回「日本語教育と国語教育の違いを考える」

「国語」という言葉は、いつどのように成立したのでしょうか。明治時代初期において近代国家の樹立が急務で、国民の意思疎通が速やかに行えることが政府にとっては喫緊の課題でした。全国民共通の「国語」が必要だったのです。江戸時代末期まで諸藩で独自に行われていた教育は、明治期に入り国家主導に変わっていきます。幕末から明治にかけて書き言葉と話し言葉の乖離は現代以上であり、漢字不要論や言文一致が叫ばれたものもこのころでした。また表記が漢字カタカナ交じり文であったことも、特徴的なことです。また、この表記においても漢字・ひらがな・カタカナを使うのではなくローマ字で表すべきだという主張が明治初期にも、第二次世界大戦後にも起こります。しかし、そのローマ字論が実行に移されることはありませんでした。

一方で「日本語教育」という言葉は、日本語を母語としない方々に対して「外国語」として「日本語」を教育する場合に用いられています。その方向性として、①学習者を社会的存在として捉える、②言語を使って「できること」に注目する、③多様な日本語使用を尊重するとこれらを三つの柱として掲げています。（文化審議会国語分科会令和3年10月12日日本語教育の参照枠報告より）



「国語教育」と「日本語教育」はそれぞれ対象や目標だけでなく学習時間や諸条件が違いため、その学習内容を単純に比較することは出来ません。しかし学習漢字数が近い例を見比べることは可能であり、小学1年生（日本漢字能力検定）とN5（日本語能力試験JLPT）、小学6年生とN2の漢字問題を比較してみました。学校教育における国語学習では、言葉の特徴や使い方・文法や語彙だけでなく、情報の扱い方、我が国の言語文化、思考力・判断力・表現力の指導なども盛り込まれており、日本語教育にはあまり登場しない絵本・物語・文学作品も含まれています。当然「国語教育」と「日本語教育」には大きな隔たりがありますが、これからは両者の融合の道もあるのではないかと考えています。

そこで、哲学者・今道友信氏の海外体験をもとに中学生向けに書き下ろした「温かいスープ」を、参加者の皆様に読んでいただきました。人間が「人として他者とのような関係を築くべきなのか」、常に心に留めておきたい文章です。

第2回「授業で使える練習問題・試験問題を作ってみよう」

この回は、より実践的な内容を目指して、問題の検討作成に時間を割きました。問題を作成することは、教えるだけでなくその成果を客観的に評価し、受講者の方々へフィードバックする材料として更なる練習へ繋げる意味があると考えています。

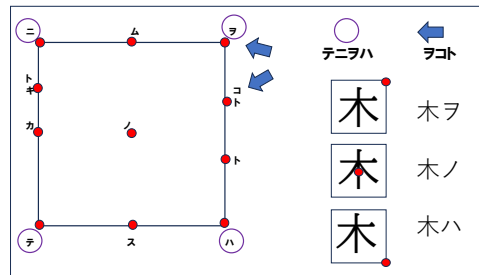
練習問題では助詞や動詞・形容詞・助動詞の活用を問うことがあり、セミナーでも下記のように、空欄に入る助詞と一緒に考えました。特別に指示がない問題であれば、当然空欄にはいくつもの助詞が入り、解答は一つではないことが分かります。それぞれ意味の違いを考えて発展的に練習するのであれば全然問題ないのですが、主観テストと違って客観テストとなると、誰が採点しても同じ結果が得られることが要求されます。下記の選択肢には格助詞だけでなく、取り立て助詞と呼ばれる「は」「も」が含まれていて、問題作成に際しては注意が必要です。

〔練習問題〕 _____ に入ることを下の _____ から選びましょう。

1. これは姉 _____ もらったペンです。
2. 兄は町で一番大きい病院 _____ 生まれました。
3. 阪神タイガース _____ 勝った。
4. 駅で友達 _____ 会った。
5. ハンバーガー _____ いい。
6. 本 _____ 家 _____ あります。

が に は と へ も で を の

また事前に頂いたご質問の中に、「てにをは」に関するものがありました。近年では「てにをは」がおかしいといえば、助詞の使い方が不明瞭で文脈が整っていないという意味で使われています。しかし昔は、「てにをは」は「ヲコト点」とも呼ばれ、漢文を訓読する際に読みやすくするために打った点のことで、漢字に打つ点の位置によって漢字文を読み下して理解していたようです。



日本語学習では、文法(学習項目)を使って例文を作る練習があります。しかし、自ら文を作るのはあれこれ考えて時間もかかり、ハードルがとても高いです。そこで先ず例文を用意し、その内容を自分の状況に照らし合わせて簡単に答える練習を紹介しました。例文を理解し、発話する段階を経ることで難易度を下げることが出来るのです。

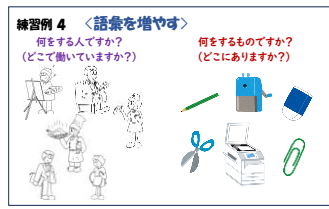
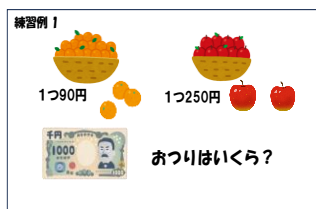
1. 休みの日は、何もしないで家でゴロゴロするに限る。
 2. 暑い日の仕事終わりには、冷たいビールに限る。
 3. 寂しい時は、映画を見るに限る。
 4. 最近太ってしまった。甘いものは食べないに限る。
- ⇒ 1~4は、自分の生活と見比べてみると、(あてはまる・時々そう思う・全然違う)

練習問題や試験問題の作成には時間も労力もかかりますが、既成の問題集を使っていたのでは気づかない点やきめ細かな指導が出来るメリットがあると考えています。

第3回「話す力を伸ばすには」

流暢に話すことが語学の上達目標のような響きがありますが、「話す」ことは「相手」が存在することで、それは聞き手へ伝える力でありコミュニケーション能力と言えるでしょう。そこには臨機応変な対応力が求められ、分かりやすく説明する力、人の考えや意見を汲み取る力(傾聴力)が必要になってきます。

しかしながら、日本語学習者はそれ以前の問題として思うように話せないもどかしさを抱えていることが多々あります。これにはいくつかの段階があり、絶対的な練習量や語彙が不足している場合が考えられます。あいづちなど簡単な表現を覚えるだけで、自発的な発話に展開することができるケースもあります。「そうですか」という短い言葉でも、言い方一つで「納得・了解・安堵・反対・不信」など様々な表現になります。それらの言葉の持つ様々な機能にも注目して会話練習に取り組みました。



話す際に、身につけた豊富な語彙は最大の武器です。そこでセミナーでは訳語に頼らず語彙を増やすことや、言葉を簡単に説明する練習、会話練習に使えそうな練習例を多く紹介しました。参加者の皆様同士での練習を通して、多くの気づきと様々なご感想をいただきました。

話す力を一気に伸ばすことは難しくても、話すきっかけを作り(話題提供や様々な練習問題を使って)、あいづち等を駆使すれば、少しずつ上達を感じられると確信しています。その際には、聞き手に分かりやすく伝えようとする気持ちが大切だと考えています。

語学に携わる者として、指針とも言えるものがあります。それは、古代ギリシャの哲学者ソクラテスの産婆術という考え方です。自身の母親が産婆であったソクラテスは、その産婆という仕事に注目し、独自の教育論哲学論へと発展させたものです。「私は知識を授けるのではなく、知識を生ませる手助けをする産婆である」とどんな指導の場面においても使える、含蓄のある言葉だと改めて思いました。

地域日本語教育主任コーディネーター 片平協子

閉講式で見られた受講者同士の絆

第2期オンラインモデル日本語講座が2月16日(日)に閉講式を迎えました。

閉講式恒例のスピーチでは、笑いあり涙あり、大きな拍手と笑顔で盛り上がりました。たねクラス(入門クラス)は、全員が前に並んで立ち、リレー形式で自己紹介や日本語講座の感想を話しました。次のスピーカーを受講者同士で紹介するなど、仲の良さが伝わってきました。わかばクラス(初級クラス)は、それぞれが思い思いの表現で、一緒に学んだクラスメートや担当講師、運営スタッフへの心からの感謝の気持ちを述べました。

式が終わっても、名残惜しそうにおしゃべりしたり写真を撮ったり先生に感謝の気持ちを伝えたりする受講者の皆さんを見て、日本語学習を通して生まれた絆やそれぞれの目標が、今後の日本での生活にさなる彩りを与えてくれるよう願っています。

地域日本語教育コーディネーター 北川恵子



修了証の授与



段林ひろみ先生、松城聡先生と一緒に



たねクラス
閉講式で発表の様子

令和6年度滋賀県地域日本語教育推進事業を振り返って

今年度も「滋賀県生活者としての外国人のための地域日本語教育推進アクションプラン」に基づいて本事業を展開してまいりました。言語・文化の相互尊重を前提としながら、「生活者としての外国人」が日本語で意思疎通を図り、生活できるようにすることを目標に以下のような内容に取り組んできました。

- ・日本語学習機会の提供として「モデル日本語講座」の実施
- ・日本語学習支援者の確保・育成を目的とした「日本語学習支援者セミナー」の実施
- 「入門編」「ステップアップ編」
- ・これらの取組を広く伝えるためのニュースレターの発行:本誌TOMONIの発行
- ・日本語教育に関する情報収集

ここで課題として見てきたのは日本語学習者のニーズも多様であること、外国人県民に日本語教育が求められていることは確かであるが、それをどう届けるか、またどのようにして周知するかに難しさがあること、日本語学習支援者の方々もより多くの研修の機会を求めていることでした。

これらの課題解決のために他県を訪問して直接担当者から学ばせていただくこともできました。滋賀県に居住する外国人県民の皆さんの状況も時とともに変化していくと思います。これから外国人県民の皆さんが安心して暮らし、地域社会の一員として活躍できるよう、地域日本語教育の推進に取り組んでまいります。

滋賀県地域日本語教育推進事業 統括コーディネーター 久保田展史



発行: 滋賀県
(滋賀県地域日本語教育推進事業 事務局 〒523-0891 近江八幡市鷹飼町537-3 (一財) 滋賀YMCA内)
文部科学省 令和6年度「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」活用 【2025年2月発行】

